

朗読するための詩を書いていたこともあり「言葉は文字ではない、音だ」という実感を強く持っていました。ただ活字を見るだけでなく、声に出すと、その音が新しい意味を持つ——そう思ってたひと言が、私の人生を変えることになると思いますませんでした。

刑務所で絵本を読む

10か月ほどたったある日、刑務所から「社会性涵養プログラム」なる新しい教育プログラムにおける言葉の講座の講師になってほしいという依頼が来たのです。月に1回を6か月。仰天しました。朗読のワークシヨップの経験はありましたが、いったい何をどのように教えればいいのか。しかも相手は殺人、放火、レイプ、覚せい剤……といった重い罪を犯した17歳から25歳までの男子です。尻込みする私を説得したのは、電話をかけてきた教育統括担当の細水令子さんの「この子たちに美しい言葉を、寄せては返す波のように聞かせてあげたいのです」というひと言でした。

涵養という言葉は耳慣れないですが「水が染みこむように育てていく」という意味で、社会になじむことが困難なタイプの子、軽度の知的障害や精神疾患を抱えている子に、会話や絵画、言葉を通して内面を豊かにしよう

という教育プログラムなのだそうです。マニユアルはないのですか？ と聞くと、「寮先生のお心のままにどうぞ」。余計に面食らいましたが、とにかく一人で行くことが恐かったので、夫と一緒になら、という条件で承諾しました。

初めての授業は8人の少年に、私と夫、刑務所の教官が2人、そして細水さんが参加しました。ふんぞり返っている子、目が宙を泳いでいる子……正直「無理！ 交流不能だ！」と思いました。でも引き返すわけにもいきません。

私が用意した題材は自分が書いた絵本『おかみのこがはしってきて』でした。「絵本なんて女子どもの読むもんだ」「馬鹿にしてんのか」と彼らが思わないように、絵本は大人だって読むということ、絵本を作るのは小説を書くより難しい場合もあるということ、みなさんがいずれ社会に戻って父親になったとき、子どもに絵本を読んであげられるお父さんになってほしいということを一生懸命伝えました。

「彼らに美しい言葉を、波のように聞かせたい」。心が動かされました

